

- 1  JECの流れ(神学)の  
継承・深化・発展の最良の手段  
としてのエリクソンの「キリスト教神学」

### 総論 : JECの神学方法論について

エリクソン博士をお迎えしての  
「JEC拡大教職者会」レジュメ  
関西学院会館: 2003.3.11  
一宮基督教研究所: 安黒務

- 2  「歴史的ルーツと連続性」への呼びかけ

1. 聖書と聖霊さえあれば、過去と無関係？
2. キリスト教遺産の豊かさを見失う
3. キリスト教遺産の回復の要請
4. 教会の歴史 - 聖書に従って教会を改革しようとする福音主義的衝動
5. 福音が聖霊の働きによって解き明かされた
6. 聖書の示している福音の枠を守りつつ
7. 他の時代や他のもろもろの運動から学び取る
8. 福音の全体的意味・十全な意味で福音主義的

- 3  歴史神学の視点からみたJEC

- 1
1. 三つの要素
  2. 使徒的キリスト教
  3. 古代教会の正統信仰
  4. 宗教改革の三大原理
  5. 改革の四つの流れ
  6. 信条
  7. 正統主義神学
  8. 敬虔主義の遺産
  9. 自由教会

- 2
1. リベラリズム
  2. エリクソン博士
  3. 結び

- 4  組織神学の視点からみたJEC

1. 多種多様な「組織神学」テキストの存在
2. 改革派、ルター派、ホーリネス・メソジスト派、バプテスト派、ペンテコステ・カリスマ派等
3. JECにおける「組織神学的特色」は？ 「十字架のメッセージ・聖霊のバプスマもしくは満たしの強調」 - しかし神学的座標軸はどこに？
4. 「JECの源流と歴史的遺産」 - 最も包括的な体系的理解 - 会衆派ピューリタンの時代「正統主義神学」
5. オレプロ宣教師 - スウェーデン・バプテスト諸教会を背景に「バプテスト的な教会観」に基づいた教会形成: 会衆制、浸礼、象徴説
6. 高橋昭市師による「H. シーセンの組織神学」教育: バプテスト的特質の継承に貢献
7. 正統主義神学を座標軸に、バプテスト的強調・ケズィック的強調・カリスマ的強調

- 5  H. シーセンとM. エリクソンの比較

- 1
- シーセン
  - 1. 教会的・実存的
  - 2. 要約的・再生産的
- 2
- エリクソン
  - 1. 教会的・実存的
  - 2. 要約的・再生産的
  - 3. 生産的・新理解的
  - 4. 合理的・学問的

6  JECの伝道・教会形成の現場で  
『キリスト教神学』をいかに学ぶか

■ 第1巻の第1部の学び方

1. 神学とは何か ○
  2. 神学と哲学 ×
  3. 神学の方法 ○
  4. 神学と聖書の批評的研究 ×
  5. キリスト教のメッセージの今日化 ○
  6. 神学とその言語 ×
  7. ポストモダンと神学 ×
- まず、読みやすく実的な必要にかなう 1, 3, 5章を丁寧に学び、  
× 将来必要が生じた場合に難解な 2, 4, 6, 7章を学ぶ。

7  第1章 神学とは何か

1. 宗教の本質
2. 神学の定義 ○
3. 組織神学の位置づけ
4. 神学の必要性 ○
5. 神学の出発点
6. 学としての神学 ○
7. なぜ聖書なのか

8  JECにおける「神学の定義」のあり方

1. 第一義的に聖書を基盤とし
2. 文化一般の文脈の中で
3. 今日的な表現を用いて
4. 生の諸問題に関連づけながら

キリスト教信仰の諸教理についての  
首尾一貫した言明をするべく努める  
学である。

9  JEC神学の必要性:無益か有益?

- イエスを愛しているなら、それで十分?
  - 神学 複雑で難しく、伝道の妨げ?
  - 群れ 神学的理解の相違が分裂へ?
1. 信仰者と神との関係 - 正しい教理が不可欠
  2. 真理と経験 - 相互に関係
  3. 擬似宗教・偽りの教え - どのように識別

10  「学として」のJEC神学のあり方

1. 明確な対象 - 例:教会政治、洗礼、聖餐の様式・意味
2. 首尾一貫した道筋
3. 説明責任:盲目的継承 理解し納得づくで
  - なぜ会衆制なのか?
  - なぜ浸礼の様式なのか?
  - なぜ象徴説なのか?

## 11 第三章 神学の方法

1. 今日の神学の状況
2. 神学研究の過程
3. 神学的言明の權威の度合い

## 12 JECと「今日における神学の状況」

1. 神学の今日的状況
  1. 神学の短命化
  2. 偉大な神学学派自体の消滅
  3. 神学的巨匠の不在
  4. 種々の行動科学の影響
  5. グローバリゼーションの傾向
2. 教訓
  1. 最近の文化・風潮に同調しすぎるな: 神学の急激な変化 文化一般の急激な変化
  2. ある程度の折衷主義が可能: 狭い基盤で聖書資料の収集・統合はいけない
  3. ある程度の独立性: 盲目的継承 最も悪い弟子、思考の停止 改善できる点を進んで修正しうる者に

## 13 JECにおける「神学を研究する過程」

1

1. 聖書の資料の収集
2. 聖書の資料の統合
3. 聖書の教えの意味の分析
4. 歴史における取り扱いの検討調査
5. 他文化のもつ視点の検討

2

6. 教理の本質の見きわめ
7. 聖書以外の資料からの光
8. 教理の今日的表現
9. 解釈における中心的モチーフの展開
10. 主題の層別化

## 14 JECにおける「神学的權威の度合い」

1. 聖書の直接的言明
2. 聖書からの直接の含意
3. 聖書がおそらく含意している
4. 聖書から帰納的に引き出される結論
5. 一般啓示から推論される結論
6. 神学者のまったくの憶測からの言明

JECの働き人は、  
その資料の源泉の性質から、  
大きすぎも小さすぎもしない  
妥当な価値を与えつつ、  
資料を用いるべき

## 15 第5章 メッセージの今日化

1. 時代遅れへの挑戦
2. キリスト教における永続性の領域
  - 制度・組織、神のみわざ、経験、教理、生活様式
3. 神学を今日化する二つのアプローチ
  - 改変者 × と翻訳者
4. 永続性の基準
  - 文化を超えた恒常性、普遍性を示す状況、基盤とした認められた永続的要素、本質的なものとみなされた経験との確固とした結びつき、漸進的啓示の中での最終的位置を占めていること

## 16 「時代遅れとなること」 に対するJECの挑戦

1. 「聖書の世界」と「現代世界」の大きなギャップ
2. プルトマンの極端な理解: 神話的世界観と現代の世界観の極端な対比 「聖書の教え」の再解釈
  1. 三層の世界観、奇跡、悪霊、靈感、幻、霊的戦場、苦難・審判、救いか滅び、最終的狀態
  2. コペルニクスの世界観、四隅のある平らな地上×、悪霊ではなくウイルス、昇天の場所は宇宙のどこ×、再臨も神話で終りがあるとしたら核兵器による大虐殺
3. 現代のクリスチャンは二つの異なった世界に生きている
  - 日曜の午前は、斧の頭、川の水、ロバ、人、死者、処女が...
  - 平日は、テクノロジーや科学の発見が活用される異なった雰囲気の世界に生きて「心理的困難」を覚えている

## 17 JECにおける「永続性の領域」

1. キリスト教における永続性の領域
  - 制度・組織、神のみわざ、経験、教理、生活様式などのいずれか？
2. エバンジェリカルとしてのJECの立場は
  - 永続性の領域は「教理」である
  - そして、この箇所で言われている意味ではないが「聖霊の超自然的働き」とそれに伴う経験の永続性を信じている。

## 18 「神学を今日化する二つのアプローチ」と JECの選択

1. 改変者
  - 現代人に合わせて、メッセージの本質まで改変するべき
2. 翻訳者
  - メッセージの本質を保持しつつ、提供する形式を工夫する
  - メッセージには、歴史的に権威あるものと、普遍的に規範となる権威のあるものがある
  - 洗礼と洗足の比較検討

## 19 JECにおける「永続性の基準」

- 永続的な要素と一時的形式を識別する
- 識別の原則
  1. 文化を超えた恒常性
  2. 普遍性を示す状況
  3. 基盤とした認められた永続的要素
  4. 本質的なものとみなされた経験との確固とした結びつき
  5. 漸進的啓示の中での最終的位置を占めていること
- 啓示には必ずポイントがある
  - その基礎となっている真理とは何か: 系図、公衆衛生の記事